

五山文學新集

第五卷

玉村竹二編

玉村竹二編

五山文學新集

第五卷

東京大學出版會

學術書刊行基金

編者略歴

明治44年 名古屋に生る
昭和10年 東京大學文學部國史學科卒業
同 年 東京大學史料編纂所員
昭和44年 東京大學史料編纂所教授を退官

著 書

『五山文學』至文堂
『夢窓國師』平樂寺書店
『圓覺寺史』春秋社（井上禪定共著）

現 住 所 東京都杉並區上荻4丁目4番5號
杉並コーポラス303號

五山文學新集 第五卷

1971年3月31日 發行

定 價 8800 圓***

檢 印
廢 止

© 編 者

たま むら たけ じ
玉 村 竹 二

發行者

福 武 直

發 行 所 財團法人 東京大學出版會

113 東京都文京區本郷 東大構内 (811) 8814・振替東京 59964

ヨシダ印刷・矢嶋製本

3395-86151-5149

五山文學新集

第五卷

序

本集全六卷刊行豫定のうち、漸くその第五卷が完成した。本當に文字通り「漸く」といふ實感である。といふのは、一昨年に、本集校刊に専念するために、東京大學史料編纂所を辭したが、その甲斐あつて、第四卷には、大いに力瘤が入つた。しかしそのうちに収めた中巖圓月の作品集については、その作者が、豫てから私の敬愛措く能はざる人であり、その至誠が天に通じたものか、偶然にも、校刊の途次に、相ついで善本の出現を見、大いに感應道交の不思議な因縁を喜んだが、その結果、底本の轉換をしなければならなくなつたり、尨大な作品拾遺をしなければならなくなつたり、またその貴重な本の成立の由來の穿鑿のために煩瑣な解題が必要となつたりして、あまりに之に没頭した結果、些か健康を害してしまつた。この一年間は毎週醫者通ひで、藥餌に親しまざるを得ない仕儀となつた。まだ病床に臥するところ迄は行つてゐないが、「漸く」といふのは、かういふ事情からである。しかし多くの方々の溫情に支へられ、また幸にして症情は横這狀態であつたので、こゝに本巻を世に送り出すことが出來た。しかしあともう一卷残つてゐる。本當に芯から疲れたという感であつて、残りの一卷は、餘程の餘勇を振つて立向はなければなるまいと思ふと氣は重い。一千頁を越す校刊を連年つゞけるには、五卷（五年）が體力の限界ではなかつたか。當初の豫定は五卷完結であつた。その通りにして置けばよかつたと、今更悔まれるが、今となつては運命はきまつてしまつた。若し六卷が完成出來れば、それだけ多くの作品集の傳承が約束されるのであるから、さうなれば、私個人としても、學界のためにも、この

上の幸はないのである。それ故あと一巻は、何としてでも仕上げなければならない。

毎巻の序に繰返すことであるが、嘗て上村^{うむら}觀光居士によつて刊行された『五山文學全集』には、五山文學の主要な作品が收録され、大正初年以來學界を益すること多大であつたが、惜むらくは、もう一步といふところで中斷してしまつた。且つ文學作品としての價值以外に、歴史の史料としての價值を認めるとすれば、なほ更多くの未刊の五山文學作品があり、そのうちには、一流のものでまだ一般世人の目に觸れることなくして埋もれてゐるものも一二に止まらない。

これは斯學のために甚だ遺憾である。どうかして、これらを公刊したいといふ趣旨から、戦前に於て、既に元史料編纂所長森末義彰氏（當時は史料編纂官であつた）が、この集の企劃を立て、その手始として、横川景三の『補庵京華集』（本集第一巻所収）を手がけ、原稿作成の段階まで行つたが、戦争の熾烈化によつて、その計劃は頓挫した。それを昭和四十年春、當時の史料編纂所長竹内理三氏が復活され、東京大學出版會から刊行されることになつた。もつと詳しい経緯は第一巻の序に述べておいたから、それに譲るが、以上のやうな事情で生れたのが本集であり、名づけて『五山文學新集』といひ、一應『五山文學全集』とは別個のものとし、未刊のものを優先するとはいへ、『全集』を含めて、他の叢書所収のものなど、おしなべて、既刊のものと雖も、それよりもよい本を得れば、それを底本として、本集に收録し、また時には泥中の白蓮の如き、未知の作者の珠玉篇をも、その間に交へて收載し、世に紹介しようとするものである。例へば本巻に收めた一峰通玄の『海滴集』などがこれである。

本巻に收めた蘭坡景菴・天隱龍澤は、共に第一巻に收めた横川景三、第四巻に收めた正宗龍統・彦龍周興、第六巻に收める豫定の萬里集九と共に、應仁の亂前後に亘る、東山時代の作者群に屬する。『五山文學全集』が、景徐周麟を除いて、悉く亂前の作品にとゞまつてゐるが故に、これら東山時代の作品の紹介が、本集の當然の責務の一つとなるか

ら、本巻でもこれを取りあげた所以である。殊に天隱龍澤は、夙に第二巻に収載の豫定であつたが、諸本が錯綜して、それを如何に裁くかが問題であつたために、氣がすゝまず、つひに最終巻間際まで迫込まれ、漸くにして、本巻に収録の決心をつけたもので、本巻の半分を占める膨大な作品量であるが、その史料的价值は拔群である。從來『天陰語録』『默雲藁』七言絕句の部の二本が『續群書類從』に収めて活字になつてゐただけで、過半の作品は、今回初めて公刊されるものである。蘭坡景菫の作品については、從來全く世人一般の目には觸れてゐない。戦後、古梓堂文庫が大東急記念文庫の有に歸した際、史料編纂所の人々が、その入架整理の助成をしたが、私もその一員として、多くの典籍に接した際に、蘭坡の『雪樵獨唱集』の古寫本にして、内容も語録・法語・疏・序・跋・說・銘・偈頌等の多方面に亘る善本の存在を知り、また、二十年近く前に南禪寺正因庵（蘭坡ゆかりの塔頭）の塔主である櫻井景雄師の示教により、相國寺長得院に、その詩集のあることを知り、夙に撮影を許されて手許に焼付を所持してゐたので、今回は、この大東急本と長得院本を目當てにして、同人の作品集収載をきめてゐたが、いざ収録の段階で、揆らずも、これも早くから御茶の水圖書館の有に歸してゐる成簀堂文庫本の異本『雪樵獨唱集』の閲覧が叶ひ、思ひがけない方向に問題が發展し、その四六文集には、非常に複雑な異本が成簀堂文庫・尊經閣文庫や建仁寺兩足院の本に亘つて存在することに氣付き、本巻所收作品についていへば、恰も第四巻の中巖圓月の場合のやうに、校刊の段階で、根本的にやり直しを餘儀なくされ、それらの本が多く東京にあつたので、中巖の時ほどの労苦はなかつたとしても、手摺にかけただけあつて、思ひ出深いものとなつた。瑞溪周鳳は、義堂周信・絶海中津に次いで、室町時代中期の五山文學作者としては、世間に有名であるが、その日記『臥雲日件錄』が夙くから『史籍集覽』に収めて公刊されてゐたのに對して、詩文の方は、案外世に知られなかつたものである。殊に御茶の水圖書館の異例の好意により、同館所藏で、これも成簀堂文庫本である『溫泉行記』を収める

ことが出来たのは、非常な喜びである。一峰通玄は、南北朝時代の人で、その全生涯の過半を元國で過した人であり、したがって、その作品は悉く在元中のものであり、日本人が、中國人の間に在つて成遂げた中國風文學の創作活動の成果の例證として貴重なものであり、雪村友梅の『岷峨集』、別源圓旨の『南遊集』、龍山德見の『黃龍十世錄』の「元朝偏頌」の部、中巖圓月の『東海一漚集』の一部などと比肩すべきものである。これも第二卷に収める豫定であつたが、紙數超過のために割愛されたのが幸して、その後、事情が變化して福嶋俊翁師の御好意により、最良の本たる東福寺光明院本を底本とすることが出来て、改めて本卷を飾ることを得たのも、これまた本卷を世に送るに際しての喜びの一つである。

この卷の校訂刊行に當つても、從來と變らず、和漢の文獻に通曉した史料編纂所の碩學泰斗太田晶二郎氏の御示教を蒙ること多大である。外典故事の出典、難讀な文字の解讀については、すべて同氏の御教導に遵つた。それでもなほこの方面で誤謬が残つてゐるとしたら、それは不覺にも同氏に教を請はずに、さかしらに自己流でやつてのけたためか、或は教を受けても、その趣旨を誤解したために生じたもので、その責任は、専ら私に在るといふべきである。玆に更めてあつく御禮を申述べる。

次に印刷校正については、本卷も専ら千葉大學の田中久夫氏が、多忙な時間を割いて、獻身的な助力を惜しまれず、一々原本にあたつての校正をして下さつた。殊に本卷には御茶の水圖書館本を四部も底本に用ひてあるが、その分に就ては、態々數回に亘つて同館に向いて原本當りを遂げて下さつた。誠にお禮のことばもない次第である。

原稿の書寫は、大部分は私自身の手になるが、たゞ特筆すべきは大東急本『雪樵獨唱集』のことである。これは、廣島大學の中川德之助氏の手になるものを用ひさせていたゞいた。同氏は、嘗て昭和三十六年度に、五山文學研究を題目

とされ、内地留學生として、史料編纂所に一年間來られた。その時の指導教官は森末義彰氏であつたが、實地には私
が、いろ／＼お世話した。同氏は誠に篤實なる學徒で、留學の期満ちて、廣島に歸任されるに際し、私の垂涎措く能は
ざりし大東急本の『雪樵獨唱集』を、私のために、自ら全巻を書寫して、お世話をした謝禮として贈られたのである。
十紙や二十紙のものならいざ知らず、三百紙を超える巨冊を、親しく筆寫して下さつたのは、餘程の御厚意である。私
はこの浩瀚な作品を、お蔭を以て、手許に置いて、隨時披閱出來る幸運に恵まれたが、今回之を收録することに決したの
で、その本をそのまま原稿に轉用させていただいた次第であり、大いなる學恩を蒙ることとなつた。同氏には、本集の
校刊に當つて、從來も、陰に陽に御鞭撻を受けて來たが、本巻では、如上の事情により一層のお世話になつたので、改
めて篤く御禮を申上げる。また兩足院本『默雲藁』（結果としては成實堂本に底本轉換をした）の書寫については、駒澤大
學の葉貫磨哉氏の手を煩はした。繁忙な學生指導の間隙を縫つて、この事を成遂げられた勞苦に對して、これ又深甚の
謝意を表する。

更に諸本の本文採訪撮影については、大東急本『雪樵獨唱集』に就ては、數年前、史料編纂所の桃裕行氏が、同所の
所要で同文庫の他の本を撮影した際に、私が他日この本の焼付を必要とする事を豫見して、御親切にもその序でに撮影
させておいて下さつたものを、今回その豫期通りに用ひさせていたゞいた。長得院本『雪樵獨唱集』は前述の如く、昭和
二十八年頃、櫻井景雄師より戴いた焼付を用ひた。『臥雲稿』『瑞溪疏』『翠竹眞如集』は明治大學の臼井信義氏、
『天隱和尚語錄』『異本默雲藁』は田中久夫氏、兩足院本『默雲藁』は東京國立博物館の海老根聰郎氏の撮影にかか
るものである。共にあつく御禮申上げる。

また諸本の閲覽校訂については、東京大學史料編纂所には『臥雲藁』『瑞溪疏』『翠竹眞如集』を底本として、相國

寺長得院には『雪獨樵唱集』（絶句の一）を底本として、大東急記念文庫には『雪樵獨唱集』（語錄・法語・文・疏・銘・偈頌）を底本として、御茶の水圖書館には『雪樵獨唱集』（絶句の二）『雪樵獨唱集』（四六文集）『温泉行記』『默雲藁』を底本として、東福寺光明院には『一峰知藏海滴集』を底本として、建仁寺兩足院には異本『默雲稿』『天隱和尚文集』『默雲集』（四六文集）を底本として、前田育徳會尊經閣文庫には『雪樵獨唱集』（四六文集）を校訂本として、建仁寺兩足院には『雪樵獨唱集』（四六文集）『天隱和尚語錄』を校訂本として、内閣文庫には『默雲藁』（書寫本及び木版本）を校訂本として、宮内廳書陵部には『天陰語錄』を校訂本として、東京大學史料編纂所には『一峰知藏海滴集』『默雲文集』を校訂本として、閱覽撮影利用を許された。記して以て謝意を表する。

また挿入寫眞掲載については、大東急記念文庫・御茶の水圖書館・東福寺光明院・尾張妙興寺の御承諾を得た。寫眞撮影については、東福寺光明院のものは清水實氏の撮影、尾張妙興寺のものは東京國立博物館の海老根聰郎氏のお世話になり、その他は悉く史料編纂所の高澤實氏の撮影にかゝるものである。併せて篤く御禮を申述べる。

なほ本巻は印刷事情のために殊の外遅れたので、解題執筆の史料蒐集に手間取り、『實隆公記』の如き老大な史料を自ら捜す余裕がなくなつたので、蘭坡景隆・天隱龍澤についての傳記史料を同書について検索することを田中久夫氏に手傳つていただいた。これは誠に大助りであつた。篤く御禮を申述べなければならぬ。又、南禪寺正因庵の櫻井景雄師は『雪樵獨唱集』の著者蘭坡景隆の伽藍法を相承される法裔であるから、特に今回は手厚い御配慮御助成をいただいた。感佩の至である。

これら總てのことを含めて、建仁寺兩足院の伊藤東偵師、御茶の水圖書館の石原知津氏・藤田季世女史、大東急記念文庫の西村清氏、尊經閣文庫關係者としての太田晶二郎氏・飯田瑞穂氏・前田享子女史、内閣文庫の福井保氏、相國寺

長得院の緒方宗博師・同有司師・東福寺内願成寺の福嶋俊翁師、同南明院の永井大洲師、同光明院の佐々木元果師、白畑よし女史の御懇情に深く感謝する。殊に本巻では、故徳富蘇峰翁の成實堂本の善本を數多く閱覽利用が許され、錦上花を添へることが出來た。これは一に御茶の水圖書館の非常な御厚意によるものであるのは言を俟たないが、同館に紹介幹旋の勞を執られた大東急文庫の西村清氏には特に重ねて謝意を表したい。

なほ東京大學史料編纂所長桃裕行氏、同所の彌永貞三・今枝愛眞・川村新一郎の諸氏、及び瀧田英二氏・安良岡康作氏には有形無形の助言や激勵を賜はつた。殊にいつもの事ながら、底本・諸本の相當の部分をお占める建仁寺兩足院本の調査閱覽撮影について、終始一貫絶大な便宜をお與へ下さる同院主伊藤東愼師、及び本巻所収の成實堂本の閱覽校正撮影のため、略一年に亘つて格外の便宜と御懇情を忝うした御茶の水圖書館の各位には、重ねて深く感謝の意を表する。

終に、この出版に際しては、東京大學出版會の中平千三郎・成田良輔・齋藤至弘・大江治一郎の諸氏に、一方ならずお世話になり、御迷惑をかけた。こゝに改めて御詫と御禮を申上げる。

なほこの出版は、文部省昭和四十五年度科學研究費補助金（研究成果刊行費）の交付を受けて成就したものである。

昭和四十六年三月十九日

玉村竹二

凡 例

一、五山文學新集は、鎌倉時代より江戸時代に亙る日本五山禪林の漢文學作品を、校訂刊行するものである。その作者が宋・元・明の來朝僧であらうと、日本僧であらうとを問はず、また一部の詩文集のうちに包含される法語・語錄的な部分をも削除せずに収載するのを基本方針とする。

一、本卷には、蘭坡景菴・瑞溪周鳳・一峰通玄・天隱龍澤の作品を収めた。

一、卷末に各集の解題を附した。その解題は作者の傳記、底本及び校訂本として用ひた諸本の解説、作者關係宗派圖より成る。

一、『雪樵獨唱集』に於ては、四六文の文言が大いに異なる諸本がある。大東急文庫本は作品全集ともいふべきで、勿論そのうちに四六文が含まれてゐるが、今は永正七年、東福寺善慧軒の彭叔守仙の自筆の古寫本（成實堂文庫本）によつて四六文の部を重複して掲げ、諸本の異同を大東急文庫本の疏（四六）の部とこの本の頭書に註記にして示した。

一、天隱龍澤の諸集は、それ／＼一部づつ重複がある。しかしそれを割愛すると、底本の原形を壊すことになるので、重複をいとはず、それ／＼全内容を掲げた。

一、大東急記念文庫本『雪樵獨唱集』、御茶の水圖書館成實堂本『雪樵獨唱集』（四六文、東福寺光明院本の『一峰知藏海滴集』の底本は古寫本なので、校刊に當つて、用字は悉く底本に極めて忠實ならんとした。その他は、安土桃山時

代または江戸時代の新寫本であるから、それ程の嚴密さを保持せず、適宜『康熙字典』の字體に改めた。但し改行・空白等については、どの本も同様に嚴密に底本の體裁の再現に力め、闕字・平出・擡頭は、悉く底本のまゝ示した。

一、詩文の題は四字下りに一定し、七言絶句の場合、底本に於て、詩題が詩の後の餘白に記されてゐることがあるが、校刊に際しては、それらを悉く詩の前に移し、四字下りにして示した。『雪樵獨唱集』の長得院本及び御茶の水圖書館本の絶句の部、『臥雲藁』、御茶の水圖書館本『默雲藁』等、いづれもこれに當る。

一、底本の讀點にとらはれず、新たに讀點と並列點とを施し、底本の返點・送假名(殆どないが)は省略した。但し振假名は、解讀に便益ありと認めた場合にのみ、これを殘置した。

一、底本の字傍の朱點・朱圈・朱線は、原則として頭書に註した。

一、底本の朱引は省略した。

一、用字は、なるべく底本通りにするやうにつとめた。但し前項に觸れたやうに、底本の新古にしたがひ、多少緩急の差をつけた。左の括弧内に示す文字は、各本に共通して、括弧外の字體に統一した。

圖(円を用ひず)	與(与)	圍(围)	離(离)	學(学 亨)
劉(刘)	對(对)	關(関)	數(数)	聲(声 邕)
覓(覓)	含(含)	來(来 来)	盡(尽)	圖(图)
乘(乘)	昂(昂)	雙(双)	舊(旧)	舉(举 举 乳)
實(実)	璵(珣)	嶼(峙)	點(点)	籬(篱)
桑(桑)	獨(独)	答(荅)	厭(厭)	處(処 處)

書 徒 徒 髮 髮 洲 後 淵 邇 哀 宜 岸 梅 叟 似 辭 韻 香 堂 嚴 島
 屨 徒 徒 髻 髻 湯 后 洌 迹 裡 宜 岼 棋 寥 侶 辭 韵 茱 坐 厶 嶋
 困

聞 珍 嗣 松 道 富 床 潛 崖 誼 腸 爾 養 洲 鬢 徒
 峯 珍 鼎 案 衡 富 牀 潛 岼 誼 腸 爾 養 洲 鬢 徒
 (珍は用ひず) 衾 衾 衾 衾 衾 衾 衾 衾 衾 衾 衾 衾 衾 衾 衾 衾
 笑 居 體 嶺 貌 卿 嶽 會 海 圖 賢 稱 也 州 條 草
 咲 厶 牀 嶺 貌 卿 嶽 會 海 圖 賢 稱 也 州 條 草
 巖 洛 獨 妙 修 天 幹 村 溪 野 雪 花 國 寶 年
 岩 雉 獸 妙 脩 莧 榦 邨 谿 堊 霽 苳 圀 寶 季
 崑 岳 妙 脩 修 天 榦 邨 谿 堊 霽 苳 圀 寶 季
 岳 妙 脩 修 天 榦 邨 谿 堊 霽 苳 圀 寶 季
 雁 栖 無 群 須 春 以 窓 篇 峰 臺 陽 稿 聽
 鴈 棲 无 羣 須 嘗 呂 窗 篇 峯 臺 易 藁 聰
 窗 窗 窗 窗 窗 窗 窗 窗 窗 窗 窗 窗 窗 窗 窗